

そこに山があった
三田の山さがし

江戸時代に下町の火災や洪水への対策と水運の拡張とを兼ねて、川と川とを結ぶ水路が整備された。山の手では、徳川綱吉が白金御殿を造営するにあたり、物資運搬用に既存の川（古川）を拡張・浚渫・整備して、一ノ橋から五ノ橋などの橋を架けた。そんな歴史を知り、その場所を確かめに行ってみたりするうちに、そこから疑問点や新たな興味が湧きだして次の行動につながる。近頃はそんなことの繰り返しを楽しんでいる。

<1> 三田との関わり

徳川綱吉が麻布に白金御殿を建てることになり、古川（またの名を渋谷川）が整備されて、番号順の橋の名前が付けられたことについては、拙書「[番号順に付けられた橋の名](#)」に示したとおりであるが、古川の谷を挟んで北岸には芝・麻布・広尾、南岸には三田・高輪・白金の台地が広がる。三田という地名の元を辿ると「御田」「屯田」と言われており、神または朝廷に供える米を作る田があったと言われている。

高校時代を田町駅周辺で過ごしたことから三田は身近な存在だった。郵便局や宅配サービスのアルバイトを通じて日本中の地名を数多く知ることになった上に、東京都内の小さな町の名前も数多く知った。

中でも港区には不思議な名前の町が沢山あり、憶えるのも大変だったが、不思議に思うことや疑問を感じることも多く、後に地名に関心を持つきっかけにもなった。

今では大ざっぱなくくりで、しかも「丁目・番地」というデジタルな表記が多くなり、不思議も興味も感じないで通り過ぎてしまうようになったが、麻布・赤坂・芝・三田などには路地裏一区画毎に町の名が付いており、興味を持ち始めたら限りなく面白いが、いざその場所へ自転車で出向いて物品を配達するとなるとかなり難しい仕事でもあった。

中学校の友達で、三田功運町や三田綱町に住んでいる男がいたし、高校に入ったら三田四国町・三田老増町の人もいた。ある日、三田小山町に住む友人から、「町の名が三田1丁目に変わった」ことを知らされた。おそらくこの時に味のある町の名は一斉に消えてしまったように思う。

<2> 今の三田は

今春、古川の流れを遡りながら、今の地図と昔の地図を並べて眺める日が一ヶ月ほど続いた。

現在の「三田」は、一ノ橋と赤羽橋を結ぶ線（古川）を北端として、南に向かって長方形に広がり、魚藍坂と伊皿子を結ぶ線を南端としている。

二ノ橋と三田一丁目交差点を結ぶ線までを1丁目、そこから南へ三ノ橋と慶應義塾を結ぶ線までの間を2丁目とし、それより南側は、東から3丁目・4丁目・5丁目と縦に分けられている。

現在の三田4丁目の南端に「御田小学校」があり、その東側の三田3丁目に「御田八幡神社」があるので、このあたりが地名の起源たる「御田」だったのかもしれない。

三田2丁目は、韓国・オーストラリア・イタリアの大使館と三井倶楽部の広大な敷地と慶應義塾が殆どの面積を占めており、寺社が林立する4丁目とともに特殊な顔色の町になっている。

<3> 江戸時代の三田

古川の岸辺を辿りながら地図を眺めていたら、三田1丁目の北西の角に高層ビルが立ち並ばないエリアがあり、航空写真を見ると昔の下町のような家並みが残っていることに気がついた。殆どの地域が「都市再開発」と称して高層ビル街に生まれ変わっている昨今、港区の中心部にまだこういう景色が

残っているのは面白い。

古川の岸辺の歴史探訪をするにあたり、光村推古書院発刊の「東京時代 MAP<大江戸編>」を参照し現在の地図と見比べて、江戸時代の状況を調べてみた。

三田 1 丁目の、現在の三田病院から三田高校までの一帯は久留米藩有馬氏の屋敷で、屋敷の西北端には久留米の水天宮を勧請した水天宮があった。これが後に移転して日本橋の水天宮になった。

有馬家屋敷の西側は黒田甲斐守屋敷で、西端の麻布十番に面した一角は松平時之助屋敷となっている。三田 2 丁目のニノ橋から上がってくる日向坂（ひゅうがざか）の南側には、織田出雲守屋敷、その東のオーストラリア大使館がある所は島津淡路守屋敷だった。織田出雲守屋敷は、一時徳山藩の毛利日向守の屋敷だったこともあり、門前の坂を日向坂と言いニノ橋を日向橋とも言った。坂の名前は別名「袖振坂」と言われているが、こちらの方が響きが美しい。

その東側のイタリア大使館を含むエリアは松平隠岐守屋敷で、今の桜田通りまで広がっていた。

武家屋敷が広がる中に、ニノ橋から入った日向坂の北側の一角だけが寺町になっていて、圓徳寺・大乘寺・当光寺・龍源寺・長久寺・大中寺などが並んでいた。



<4> 三田の小山町

三田という地名の存在は吾妻鏡にも記されており、荏原郡三田郷と言われた。

江戸時代初期には荏原郡三田村となり、1662年（寛文2年）には商家が建ち並ぶようになり、20年ほどの間に三田村から独立した14ヶ町が誕生した。この14ヶ町は三田1丁目～4丁目、三田台町1丁目～2丁目、三田台裏町、三田同朋町、三田古川町、三田豊岡町、三田老増町、三田北代地町、三田久保町、久保三田町で、この後も明治初期にかけていくつもの町が起立し、三田村は発展的に消滅。明治2年（1869年）に、久保三田町・三田久保町・竜源寺門前・当光寺門前に圓徳寺・大乘寺・長久寺・大中寺の寺地を合わせて三田小山町が誕生した。当光寺・竜源寺門前一帯を頂とする山になっており、古来より通称「小山」と語り継がれていることから町の名にしたと言われている。

また、明治5年（1872年）には、黒田甲斐守屋敷と松平時之助屋敷も町の中に繰り入れた。

残りの久留米藩有馬氏屋敷は、明治5年に海軍省の所管となり、海軍兵器製作所となった。その後の曲折もあり、この地は空き地となった後に大正4年（1915年）に済生会中央病院が設立され、隣地に府立第六高等女学校（のちの三田高校）と赤羽小学校が設立された。

済生会中央病院は昭和40年の建て替えに際して、その費用捻出のため東側敷地を三菱地所に売却し、

その結果として三田国際ビルが建設された。

明治初期には古川の流には水車がいくつもあり、三田小山町の小山橋の近くには三基の水車が動いていた。三基の内一基は製紙工場だったがのちに活版印刷工場に転じた。日本の製紙・印刷工場の草分け的存在がこの地にあったらしい。(出典：Deep Azabuに掲載されている情報)

<5> 歩いて見た三田小山町

6月末の酷暑の午後、新橋駅から渋谷駅へ行くバス(都06)に乗った。国道一号線を走り、金杉橋で右に曲がり古川に沿って走るようになると、高いビルと高速道路のおかげで車窓への陽光もいくらか和らいできた。一ノ橋で左に曲がり、麻布十番駅前下車。

「ツイン一ノ橋」という洒落た名前の住宅公団アパートの二棟の間の道を左に入ると高速道路の下を潜り抜けて古川の流を渡る。橋の名前は「小山橋」で、今となってはここに小山町という町があったことを示す数少ない証跡になってしまった。

橋を渡ると左手のレオパレス麻布十番の一階から道路に飛び出すように商品を陳列した八百屋が出迎えてくれた。細い道の両側に二階建ての家並みが続き、その先に高層ビルが頭を飛び出している。

丹念に路地ひとつずつを舐めるように歩いて行くと、一戸建て住宅の中にいくつものアパートがあり、その名前も「XX荘」とか「XXアパート」という名前が多く、昭和40年代にタイムスリップしたかのような錯覚に襲われた。牛込の路地裏の集合住宅に住んでいた頃の景色と重なるものがあり、我を忘れて路地裏探索を続けた。

南に向かって歩いて行くとレンガ色の新建材で造った家に突きあたった。壁面の看板を見ると圓徳寺と書いてあった。日蓮宗の寺で、常祐山圓徳寺が正式名称。レンガ色の建物の左側に、さらにか細い路地があり、恐る恐る進んでみると細い階段が待ちかまえていた。階段の先は墓地で、一人の若い女性が墓参をしている姿が見えた。墓地の右側は古川の流、左側は壁のように山が建ち、その上に建つのは三田清風ガーデン。寺の正面玄関は山の上の清風ガーデンの横にあり、ここは裏口だったようだ。

次の路地に入って見ると薨を競い合うように、壁を張り出し合うように家と家が付かず離れず建ち並び、ここも背後に迫るのは崖のようにそそり立つ山。

路地を変えて進んでみると、正面に和風の豪華な作りの二階建てとしてはやや高目の建物が姿を見せた。脇に無理矢理取付けたような入口が取付けられており、その扉に書かれた「小山湯」という文字が、元は銭湯だったことを教えてくれた。むりやり取付けられたような入口の脇には、さらにさらに細い路地があり、やはりその奥には石段と崖があった。一歩下がって建物を眺め直してみたら、豪華な木造の家の後ろには立派な煙突が立っていた。

近くのアパートなどから出てくる人が下駄を響かせて歩いて来そうな感じがする路地だった。

次の路地を進むと広大な敷地と嚴重に施錠された鉄の扉の奥に、人の気配なく建つ無気味な建物が現われた。蔓植物に覆われてしまった塀に東京讃岐会館と書いた看板が付いていた。

三田小山町の南端は急峻な壁のような山が迫っており、北端は古川の岸边、西端は古川に落ちる急勾配の尾根、東側はゆるやかな起伏で芝の浜に向かう。

南端の高い所を走る道は二ノ橋から日向坂を上り、綱の手引き坂と名付けられた坂をゆっくり下る。

足で感じてみると何となく地形が飲み込めてきた。

街角で見つけた広報掲示板に貼ってあった紙を読んで見たら、「三田小山地区再開発計画」が確定した事が示されていた。昭和40年代で時計が止まったようなやさしい家並みは消えてしまい、2027年には高層ビルが並ぶ町に生まれ変わってしまうとのことだった。

気温35度を超えそうな酷暑の午後、散策を終えて田町駅前まで降りてきたら、さすがに冷たいものが飲みたくなり、コーヒーショップに飛び込んだ。

この町で生まれた人、この町で育った人、この町で過ごした人たちは、この景色が消えてしまうということを知ったら、どんな心境になるのだろうか。そんなことを思いながら駅に向かった。

<6> 三田の小山はどこにある？

紙の上で調べ、足で歩いて目で見て来て色々わかってきたら、三田小山町の「小山」のありかをもう少し細かく確認してみたくなった。本来ならば国土地理院の地形図を見れば地形の確認はできるのだが、都市部の地形図では構造物の表記が多すぎて確認が難しい。

国土地理院の web (ウォッチズ) で見ると、任意の地点の海拔高度を調べることができるので、現在の三田 1 丁目・2 丁目の主要ポイントの高度を確認してみることにした。現在の高度であって、昔の地形の確認にはなり得ないとは思いますが、想像を現実化する方法としてはこれしか考えられない。

約 70 カ所の高度を地図上に書き込み、等高線で結んで見た。何と、「小山」と呼ばれた山の存在が大きく浮かび上がってきた。

(現在の主要道路を赤色破線で表示)

頂上の高さは海拔約 20m。北東の赤羽橋近くと北西の一ノ橋近くに広がる海拔 4~5m の平坦地。

山の西側は古川の二ノ橋付近へ急峻に落ちる。イタリア大使館や三井倶楽部の庭園は南面が急傾斜になって、東側は長く裾を引いて芝浜に流れるように落ちる。そしてこの山を北から上がる神明坂、東から上がる綱の手引き坂、南から上がる綱坂、西から上がる日向坂。

現在の地形図から再現した地図なので、最高点は海拔 20m 程度だが、江戸時代あるいはもっと時を遡れば、もう少し高い山だったに違いない。



東海道を下る旅人が、愛宕山を見送った後、右前方に柔らかなうねりの丘陵を眺める。

その先に連なる伊皿子・高輪を見やり、左手に潮風を受けて軽口を叩きながら歩く。

「あの、ちょっと尖った小さい山が小山だ」

「間もなく品川宿だ、品川でちょっと休んで行くか？」

そんな会話が聞こえてきそうな……。

以上

*参照した資料

東京の地名由来辞典

竹内誠 編

東京堂出版

東京時代 MAP<大江戸編>

光村推古書院

インターネット上のブログ「Deep Azabu」

国土地理院地形図